

牧草園藝



そさい栽培管理用語の解説(1)

札幌研究農場 中原 忠 夫

ポリマルチ

畑にポリフィルムを敷くと、①地温を高め、発芽、苗の活着を早める。②水分の蒸散を抑え、適湿を保つので養水分の吸収がスムーズに行なわれる。③病害虫、雑草をおさえることなどにより生育を促進する効果があり、果菜類のハウス栽培では常識化されているが、露地栽培の各種野菜についても、播種期を10日～2週間以上早められ、20～30%の増収、品質の向上などが期待できる。

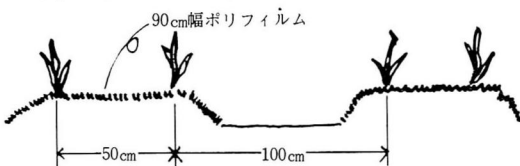
1. フィルムの種類 ポリフィルムには透明と黒があり、透明フィルムの方が黒より地温を高め、フィルムの厚さについては、使用期間、生育期間中の管理の度あい（整枝、支柱立）によって多少強弱の差を考慮しなければならないが、厚いものが必ずしも丈夫ともいえないし、使い捨てという点からも薄手のものを使用するのが得策である。ただ、透明は雑草をおさえない。除草剤の使用も考えられるが、完全に防除できないので管理上支障をきたすことが多い。黒ポリはこの点雑草をおさえるのに効果がある。最近では除草剤を封入したポリ、地温も上昇し、雑草をおさえる効果があるといわれるグリーンフィルムの開発が進められているが、何れも実用段階までに達していない。果菜のトンネル栽培で黒、透明の2重マルチがこころみられている。

2. マルチの方法 畦幅は野菜の種類、最適栽植密度によってきめられるが、マルチの場合、風を抑えるための両側の上あげ、除草を考慮にいと、広幅のフィルムを用いるより、90～135 cm幅の1～2畦1枚がけの方が仕事がしやすく、畦と畦との間からの雨水の滲透、追肥作業に好都合である。

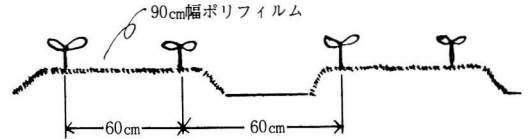
マルチ床は播種、定植の少なくとも1週間以上前に、施肥整地し、塊をくだいて平に鎮圧する。直播の場合はだいたい播種後マルチして、発芽したらその部分に穴をあけてやる。マルチの方法は3人1組となって、できるだけフィルムを引張った状態で両裾をおさえて行く。畦は中高にして水のたまらないようにする。

マルチ栽培の畦幅と使用フィルム幅

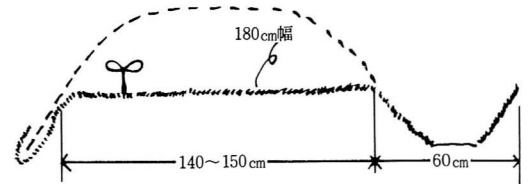
イ、スイートコーン(50cm 2条、株間30～45cm)



ロ、早生キャベツ、ハナヤサイ(60cm 2条、株間60cm)



ハ、メロン、スイカ(1条1方向整枝、株間90～100cm)



誘 引

トマトは支柱を立てて枝をささえてやらなければならないし、キュウリでも蔓を支柱にしぼり上げてやらないと曲り果が出やすく、病害虫にもおかしされ易い。トマトでは1株1株根まがり竹や細竹を合掌型に立てて、蔓やポリ紐で誘引する。最近ではトマトフックというものも売られていて能率化に役立っている。

キュウリではネット(1.8、2.4m×18m)が支柱にかわって使われるようになった。誘引は容易になったが、蔓の伸びはじめは整枝と誘引を丁寧に行なわないとうまくのぼってくれない。

わき芽かき(除けつ)

スイートコーンのクロスバンタムは分けつ数が多く、放置しておくとき間がなくなるくらいになる。この分けつ枝を取除くことをわき芽かき(除けつ)といって、必ずしも行なわなくても収量に影響がないといわれる。しかし、いままでの栽培感覚からすると、放置しておけない。除けつは早めに行なうのは勿論だが、マルチ栽培では相当丁寧に行なっても除けつ中に株を倒すことが多く、裸地のように土寄せして株を直すことが容易でないだけとらなくてすむなら放任したい。

セルリーでも30cm位に伸びると株のまわりにわき芽がでてくる。放置しておくとも株の発育がおくれるから早目にとり除いた方がよい。とりおけると傷口が大きくなり軟腐におかしされ易い。わき芽かきは2～3度行なう。ただ密植して自然軟白をねらう場合は定植後1カ月目頃に1度芽かきをして放任とする。